

六加賀藩滞在二十六年の高山右近

加賀藩滞在、二十六年の高山右近

徳川政権移行期にみる加賀藩の動向

前項の「北陸地方のキリシタン布教と迫害の歴史」で初代前田利家が死去した後、徳川からのデマ收拾のため、高山右近と横山長知が大坂に弁明に出かけたことはすでに記した。デマの解決策は、二代藩主利長の母芳春院を人質として出すという屈服により、この件は落着いた。

一六〇〇年（慶長五）関が原合戦が始まる時、加賀藩軍議のなかで豊臣の臣下石田方に味方することに対して、利長は次のように拒否した「母をすて候事いやにて候」。すなわち人質である母を見殺しに出来ない。関が原合戦では徳川に参戦したのに、その後、利長は一六〇一・一六〇二年（慶長六・七）豊国社に参詣し、豊臣に臣下の令もとり続けた。そして初代利家時代の家臣が、徳川方として戦わされたことに対しての不満を表しても、排除はせず彼らの不満を長らく潜在化させてしまった。そのため家臣同志の対立紛争が増えていった。



金沢教会の高山右近像

藩主利長が強力なリーダーシップをしめせないまま、家臣団の融和を図る策として、白山比咩神社の万句奉納。それは親しい者たちの屋敷で連歌会を開き奉納するという、文化的親睦会により、家臣団の融和をはかろうというもの。一六〇六年（慶長十一）から一年余の興業の間、高山右近は三宿老の横山長知、篠原一考、奥村永福に次ぐ地位にあり、争論裁定や年貢算用等の重要政務をしていたが、白山万句会には参加していない。キリシタン武士の内藤徳庵、浮田休閑、芝山権兵衛は出席しているのである。欠席理由は利長の遺訓にあるように高山右近が村井出雲守との不仲を案じていることから察するに、藩主としての利長の優柔不断な対応が、家臣団の亀裂を深めていくばかりだったのではと考えられる。

一六一一年（慶長十六）徳川は加賀藩などの西国大名に「三方条の置目（オキメ）」（謀叛人の召置禁止条項含む）に誓約させ、幕府による公儀支配を固めた。これは内藤徳庵などのキリシタン武士を多く抱えている加賀藩には重い課題であった。

幕府からの締め付けは強くなるばかり、一六一二年（慶長一七）のキリシタン禁制のあと、一六一四年（慶長十九）藩内のキリシタン武士の逮捕

と幕府への引き渡しを命ぜられた。これは大阪城に多数のキリシタン牢人が集結していたための対抗処置でもあり、「三方条の置目」遵守を踏み絵にした大名統制策の一環であるという説もある。

これにより、加賀藩にいた宣教師やキリシタン武士、高山右近、内藤徳庵、浮田休閑、品川右兵衛、柴山権兵衛らが逮捕された。高山右近の家族、内藤徳庵の家族は最終的にマニラに流配された。

花開いたキリシタン文化

利休の七哲の一人であった茶人右近と、親交の深かったのは金沢の右近の屋敷近くに住む家柄町人という特権があたえられた茶人である片岡孫兵衛（休庵）。その休庵に宛てた右近（南坊）の直筆文書が石川県立美術館に保管されている。内容は現代文にすると「先日、の鶴の羽箒をゆわえたから、見せ申したい。ゆわせた者が今晚来るからあなたも来るように、返事を待つ」といった内容である。また「片岡家文書」（金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵）には右近の色紙二枚の写しが記されている。

(の脱力)

おろか成おひ なみたの露けきは 夕日のかけの大和なてしこ

(印)

草かれの まかきにのこるなてしこを わかれし秋のかたみともみよ

この二首は本歌取りの和歌である。「おろか成」は『続千載和歌集』の掲載歌を記している。「草かれの」は『源氏物語』『葵』の巻にある。このように近親者が死去した時に、右近は古歌を、さらりと書きとめる優れた教養人でもあった。それは、様々な時に發揮されている。海老沢有道の『高山右近』（吉川弘文館）に利長との茶会の様子が記されている。

「利長が御近衆に茶を賜わった時、立炭をしたが、たまたま十文字の嫌炭であった。右近はこれを見て、『さてさて珍重なる御作意にて御座候。これは源三位頼政の歌の心にて御座候』と申し上げ、利長もにこやかに喜んだ。列坐の人々はそれが心得られなかったが、ある時その一人が、主君に、先日御茶を賜わった時、南坊のご挨拶申し上げた事は、いかなる意味かと尋ねた。利長は笑って、その方どもは合点参らぬだろうが、南坊は利休七人の弟子のうちでも勝れた茶湯者である。頼政が禁中で十文字という難題を下された時、頼政は『曙の峯にたなびく横雲の 立つは炭焼く煙なりけ

り』と詠じたその故事を諷したのであるとのことであつた。利長は、散々の不出来を南坊の挨拶で誉となつた。誠に数寄者であると、右近をほめたという（竹園雜記）」。

また右近は能楽にも秀でていた。「高山南坊の惣領十字郎は天下の美少年也。毎日能を致され諸人見物いたしけり。其頃はやり歌に、能を見よなら高山なんぼうおもてかけずの十字郎を。かやうに童どもうたひけり」。

また南蛮料理として「治部煮」がある。鴨（カモ）肉を小麦粉でまぶしてとろみをつけ、他の具と混ぜたものである。

この冊子のなかで、今までに「高山右近」について記したことを、まとめてみると以下になる。高山右近は文武両道の人であり少年時代から、西洋の宣教師に囲まれて、西洋文化を吸収して育つた。また、高山家の長子としても帝王学を徹底的に身に付け、日本の古来からの教養を深く広く身に付けた。そのうえに東西文化を一人で丸ごと身につけたマルチ人間でもあつた。また最も差別されていた人々への人権意識にも目覚めている、まさに「キリストに倣う」人間に育てられ「神の国」をひたすらに目指した存在でもあつたといえる。